

地域ネットワークとソーシャル・キャピタル —小平市及び品川区の調査から—

森山 千賀子・瀧口 優・草野 篤子・瀧口 眞央・吉村 季織

1. はじめに（背景と研究目的）

ソーシャル・キャピタル（Social Capital）は、日本では「社会関係資本」と訳され、主に社会学の分野で使われてきた用語である。最近では教育も含めて様々な分野に使われるようになっており、人間関係資源という表現もあるが、本稿では「ソーシャル・キャピタル」として記述する。ソーシャル・キャピタルという言葉はアメリカにおいて20世紀初頭から使われているが、1995年に政治学者パットナムが著書『Bowling alone』の中で取り上げ、アメリカ社会の分析に用いたことにより世界の注目を浴びることとなった。

本学の子育てネットワーク研究の地域研究班は、2007年度に東京都小平市のソーシャル・キャピタルについて調査し、教育福祉研究センター年報NO.13「地域ネットワークに関する調査研究」（草野他2008）及び白梅学園大学・短期大学紀要第45号「人間への信頼とソーシャル・キャピタル」（草野・瀧口眞2009）「社会的ネットワークとソーシャル・キャピタル」（瀧口・森山2009）においてその報告を行った。また2008年度には東京都品川区において同様の調査を行い、その結果については、上記年報NO.14「生活の満足度と属性」（瀧口・森山2009）「人間への信頼とソーシャル・キャピタル」（草野・瀧口眞2009）及び年報NO.15「社会への意識とソーシャル・キャピタル」（森山・瀧口2010）「人間への信頼とソーシャル・キャピタル」（草野・瀧口眞2010）として報告を行った。小平市、品川区ともに内閣府調査との差異が基本であったが、それぞれに特徴があり、比較をしてみるとソーシャル・キャピタルの違いが見えてくるので

はないかと考えた。

本稿では、小平市と品川区の単純集計部分の比較を行い、地域ネットワークとソーシャル・キャピタルの関係を明らかにすることをねらいとした。加えて本稿では、単純集計では得られなかった事象に対して、重回帰解析による分析を行ったので、ここではその内容も含め報告する。

2. 調査の概要

地域ネットワーク調査は、全てで34項目8頁にわたっている。そのうち7項目は独自に追加したものであるが、残りの27項目は内閣府が2004年及び2007年に実施したものであり、小平市は2007年9月から10月にかけて、品川区は2008年5月から6月にかけて行った。

項目群は、1. 他人への信頼について、2. 日常的なつき合いについて、3. 地域での活動状況について、4. 自身の生活状況と個別の機関や人への信頼について、5. 学校と地域との結びつきについて、6. 回答者の属性について、であった。

調査に協力していただいた小平市の小学校は、A小学校（全校生徒460名）、B小学校（全校生徒412名）で回収率が30.2%、品川区の小学校は、C小学校（全校生徒550名）およびD小学校（全校生徒700名）で、回収率48.6%であった。いずれも回答者の9割以上が、小学生の子どもを持つ30歳代から40歳代の既婚女性であった。

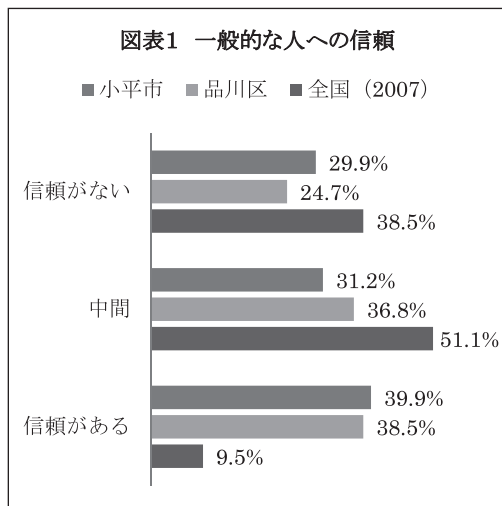
3. 結果及び考察

1) 単純集計による比較

(1) 他人への信頼

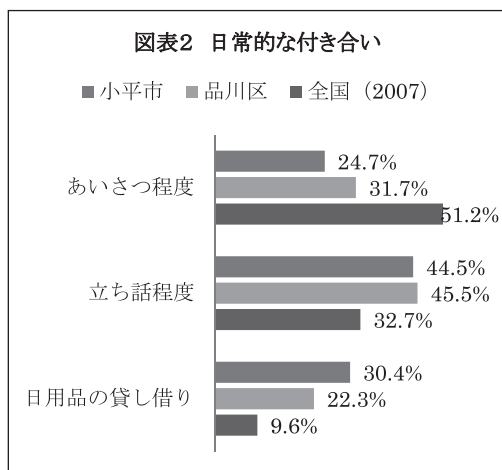
図表1では、「一般的に他人への信頼がある

か」という問いに対して、小平市も品川区もほぼ40%の回答者が「信頼がある」と答えている。「信頼がない」と答えた割合はやや小平の方が少ないが、2007年の政府調査では「ある」と答えた数がわずかに9.5%であったのと比べると2つの地域が如何に高いのかがわかる。



(2) 日常的なつきあい

ソーシャル・キャピタルにおいて最も重要な日常的な付き合いの状況であるが、一般的にはその結びつきが年々弱くなっている傾向がある (広井2009)。

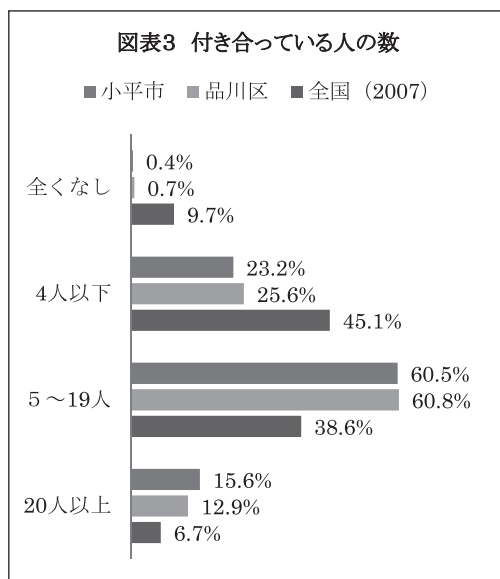


図表2に見られるように、日常的な付き合いでは「日用品の貸し借り」において小平市が30.4%に対して品川が22.3%と少なく、一方「あいさ

つ程度」において小平市が24.7%に対して品川区が31.7%と多く、品川区の方が近所付き合いの希薄さが見られる。同じ東京都内ではあっても結びつきの度合いが大きく違っている。

もう一つの「付き合っている人の数」(図表3)では小平市と品川区での違いは出ていないが、全国調査との比較を見てみるとこの2つの地域が如何に多くの人々との交流を行っているのかがわかる。

別の質問で友人や知人とのコミュニケーション頻度と手段を尋ねているが、小平市、品川区ともにほとんど割合に差がないので、身近なところでの変化であることが読み取れる。やや違いが出ているのが「親戚や親類」とのコミュニケーションの頻度で、毎日と週に1回を合わせると品川区の方が小平市よりも7ポイントほど高い。しかし手段についての割合はほぼ同じである。

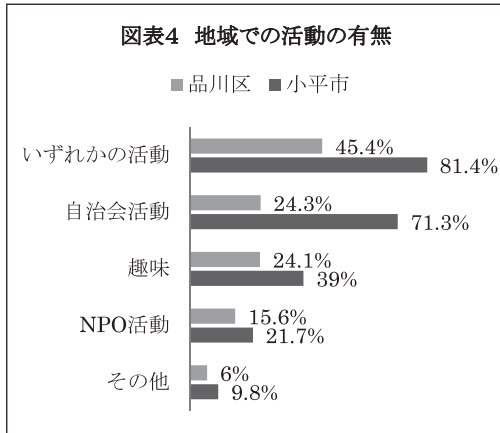


(3) 地域での活動状況

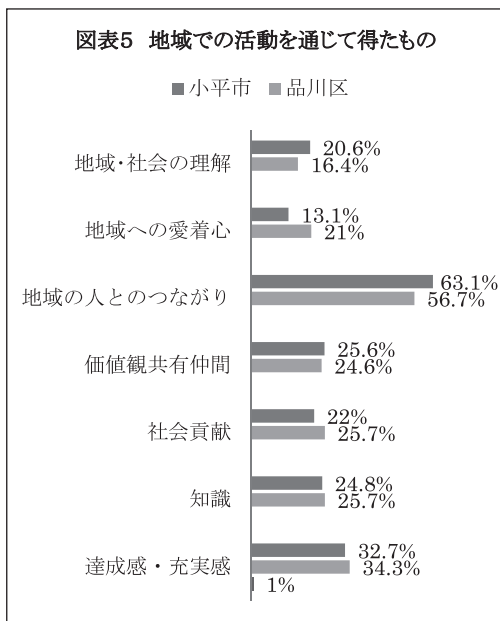
地域での活動状況については、小平市、品川区ともに「非常に盛ん」「ある程度盛ん」と評価しており、それぞれ88.5%、88.8%と拮抗している。どちらも自治体や教育委員会などが積極的に地域活動を進めている成果でもあろう。

しかし自らの活動への参加については大きな違

いが出ている。図表4ではいずれの活動においても小平市が品川区を大きく上回っており、小平市においては地域での結びつきの有無がこうした活動への参加によって培われていることが読み取れる。それにしても大きな差であり、これが何に起因するものなのかは丁寧に分析する必要があるが、小平市では住んでいる地域での地域活動が活発に行われていることは間違いない。



なお品川区の値は内閣府の委託調査の値と近い数字なので、決して低いわけではないが、小学生の子どもを持っている保護者を対象にしているこ

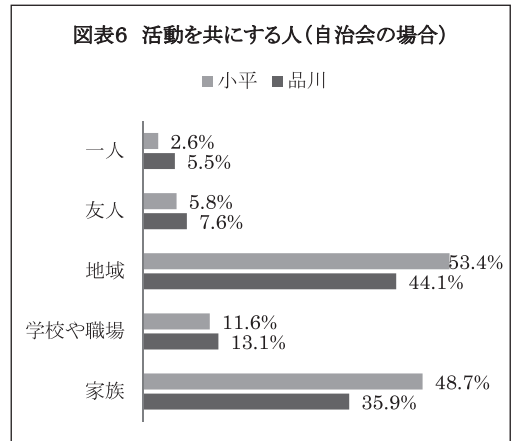


とを考えると、品川区の値は小学生を持っている親としては地域に目が向いていないことを示して

いるのではないかと考えられる。また小平市の値が高いのは、小学校の通学区域が固定されており、コミュニティスクールを目指していることとも関連しているのではないかと考えられる。

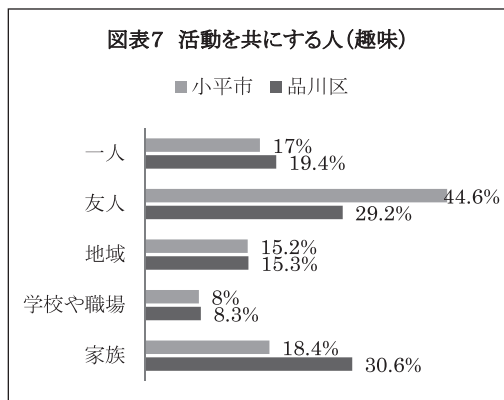
「地域の活動で得たもの」(図表5)では小平市も品川区もほぼ同じ割合になっている。最も「得たもの」が「地域の人とのつながり」で小平市、品川区ほぼ同じ数字となっている。

図表4の結果による地域活動への参加の高さと、上記の間における得たものが「地域とのつながり」であることを合わせると、小平市においては地域での結びつきが品川区に比べて非常に強いことが浮かび上がってくる。

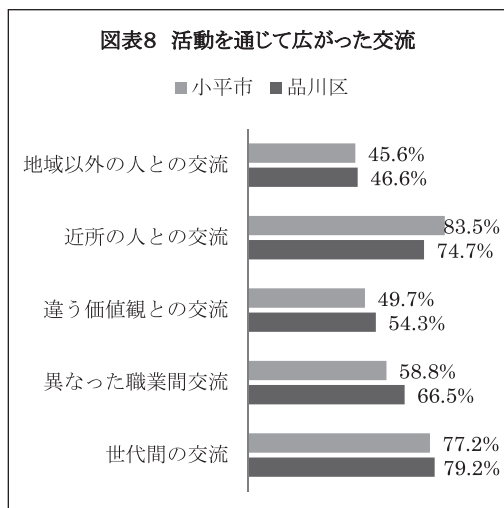


図表6は活動を共にする人を自治会にしぼって聞いたものであるが、自治会活動について「地域」で参加したり「家族」で参加するのも小平市の方が高い数値を示している。

ただし、図表7が示しているように、趣味については小平市が友人と一緒に活動する割合が高いのに対して、品川区では家族と一緒に活動を共にする割合が高くなっている。品川区においては趣味と一緒に楽しむのが家庭内に収斂されているともいえる。別項においてこどもの遊び場が品川区では自宅や友だちの家など屋内に限定される傾向があると出ており、地域におけるダイナミックなコミュニケーションとしては小平市の方が行われていることが読み取れるのではないだろうか。



図表8は活動への参加を通じてどのような交流やつきあいの広がりを感じているのかを聞いている。「大いに思う」と「やや思う」を合わせてグラフにしてみた。

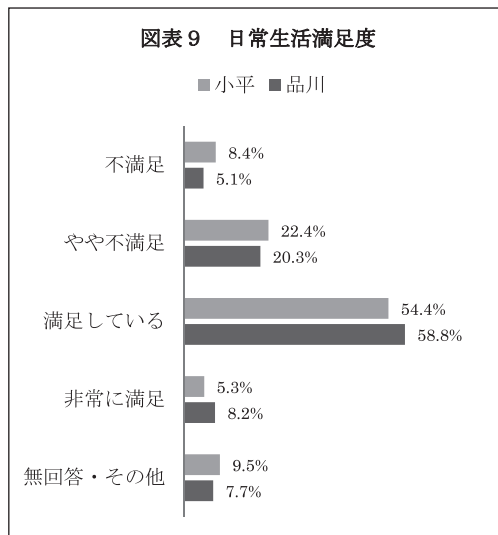


品川区においては「異なった職業間の交流」や「違う価値観との交流」が小平市に比べて多いのに対して、「近所の人との交流」が低くなっている。身近なところでの交流が弱いのではないかとと思われる。注目すべきことは「世代間の交流」の広がりが高い数値が出ていることである。地域での様々な活動が年齢を超えた交流に結び付いていることは今後の地域づくりのポイントになるのではないだろうか。

(4) 自身の生活状況と機関・組織や人への信頼

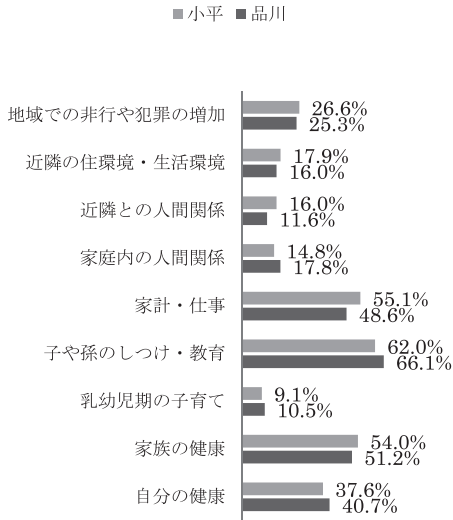
図表9の日常生活満足度では、「満足している」

と回答した人の割合は、小平市では55.4%、品川区では58.8%であった。また、満足と非常に満足を合わせると小平市は59.7%、品川区は67%であることから、相対的には品川区の方が日常満足度は高い傾向にあると考えられる。



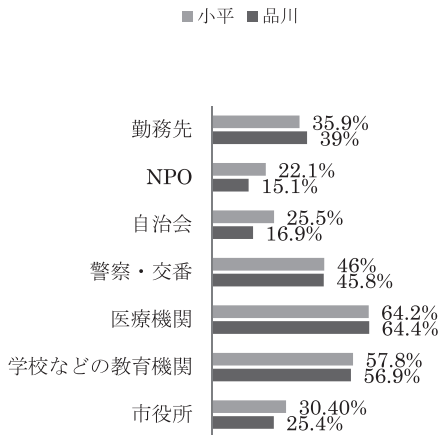
図表10の日常生活上の関心事の内容では、小平市、品川区ともに、子や孫のしつけ・教育への関心が一番高く、小平市が62.0%、品川区が66.1%であり、品川区の方が4%ほど高かった。また、家族の健康においては、小平市が54.0%、品川区が51.2%であり、半数以上が関心があると回答している。一方で、乳幼児期の子育てへの関心は小平市、品川区ともに10%程度であった。これは、本調査の回答者は小学生の子どもを持つ30歳代から40歳代の既婚女性であるため、小学生未満の子どもがいる世帯はあると考えられるが、本稿では取り上げていないが、親と子のみの世帯が全体の3/4程あることを鑑みると、乳幼児期の子どもを持つ世帯が少なく、それが関心の薄さに影響しているのではないかと推測される。加えて、小平市が家計・仕事への関心が品川区より6.5%ほど高いのは、図表16・18にあるように、専業主婦が多いことや、年間の総収入の違い(図表18)などが影響していると思われる。

図表10 日常生活上の関心事の内容



図表11の心配や関心事に対する機関や組織への頼りがいでは、小平市、品川区ともに医療機関

図表11 心配や関心事に対する機関・組織への頼りがい

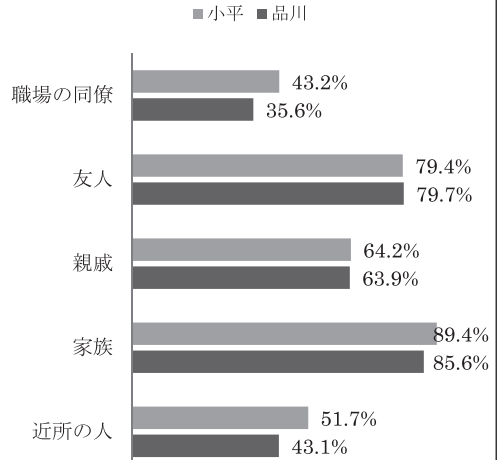


が64%、教育機関が57%程度であった。一方、自治会・NPO・市役所に関しては、小平市の方が頼りがいの数値が高く、前述の図表6・7と同様に、小平市の方が自治会等への関心が高い傾向にあることが示されている。

また、図表12の人への頼りがいに関しては、小平市の方が家族、近所の人、職場の同僚への頼りがいの数値が高かった。また、友人、親戚への

頼りがいは小平市・品川区ともに同程度であったが、図表15では放課後の子どもの遊び場としては、品川区の3割以上が友人宅と回答しており実質的には友人への頼りがいは、品川区の方が大きいのではないかと考えられる。

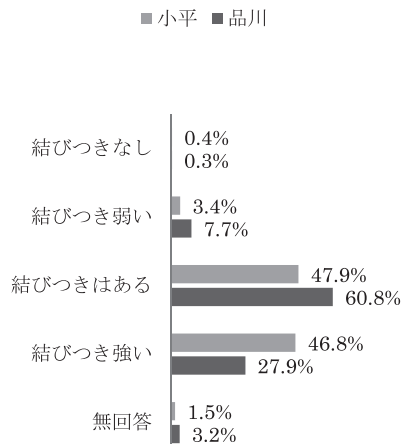
図表12 心配や関心事に対する人への頼りがい

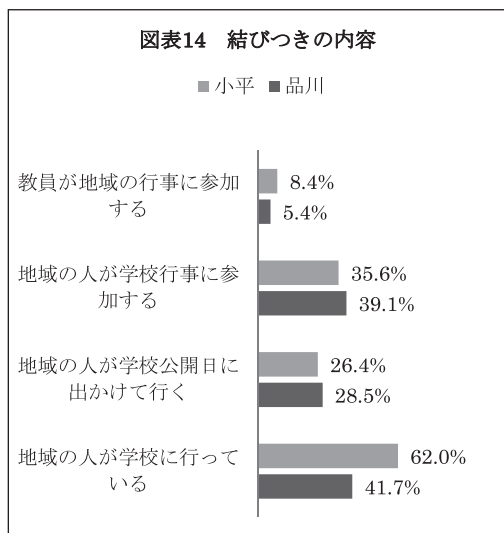


(5) 学校と地域との結びつき

図表13にあるように、学校と地域との結びつきでは、結びつきがある、結びつきが強いを合わせると小平市が94.7%、品川区が88.7%であった。結びつきの内容では、図表14にあるように、

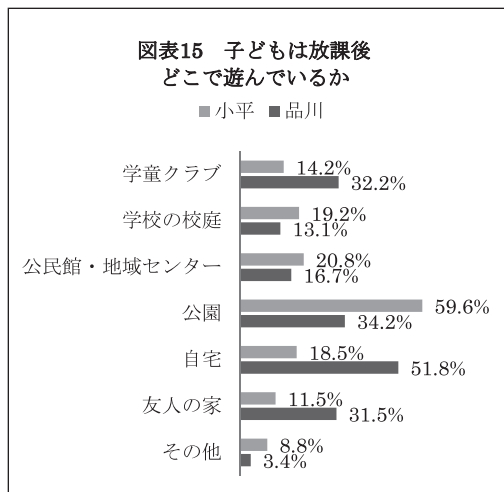
図表13 学校と地域との結びつき





小平市は地域の人が学校に行っているが62.0%であり、相対的に小平市の方が学校と地域との結びつきが強いと考えている人が多いと言えるであろう。

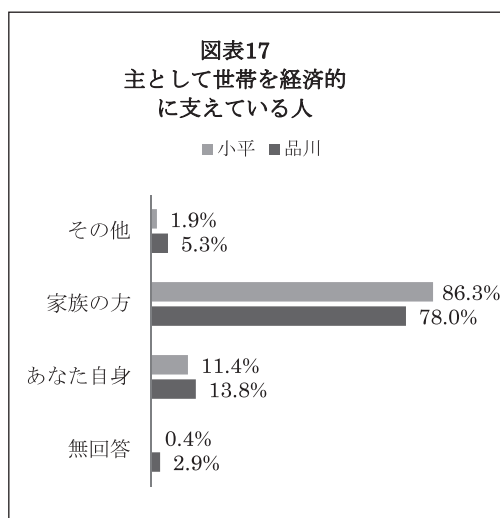
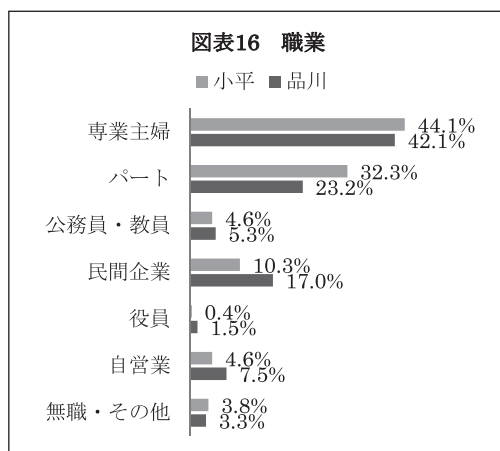
子どもの放課後の遊び場は、品川区では学童クラブが3割を越えているが、これは品川区の教育改革「プラン21」¹⁾による「放課後子ども教室推進事業」の影響が大きいと思われる。また、小平市は公園や校庭といった屋外で遊ぶ傾向があるが、品川区は自宅や友人宅という屋内で遊ぶ割合が高い。これは大都市部の品川区という地域には、屋外で安心して遊べる場が少ないなどの地域環境の違いによるものではないかと推測される。



(6) 回答者の属性

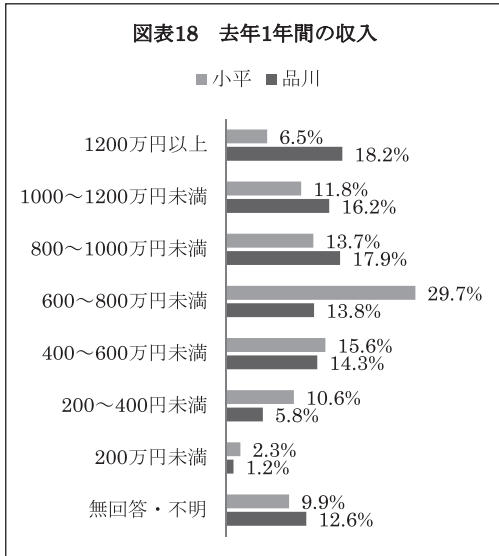
回答者の属性は、前述の通り9割以上が小学校の子どもを持つ30歳から40歳代の既婚女性であり、性別・年齢・家族構成での差異は少ない。

一方、差異のある項目は、職業・主として世帯を経済的にささえている人・去年1年間の収入・希望する家族全体の年間収入・最終学歴であった。図表16の職業の項目では、専業主婦とパートを合わせると、小平市は76.4%であるのに対し品川区は65.3%であった。また、図表17にあるように、主として世帯を経済的に支えているのは家族と回答した人の割合は、小平市が86.3%、品川区が78.0%であった。

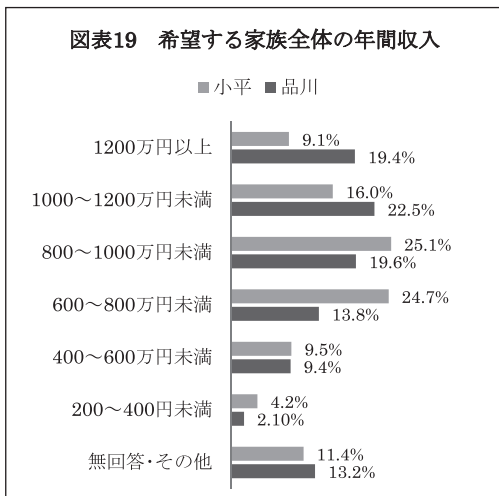


図表18の去年1年間の収入では、小平市は3割が年収600万円～800万円未満であるのに対

し、品川区の3割は800万円以上であり、相対的に年収が200万円程度高くなっている。

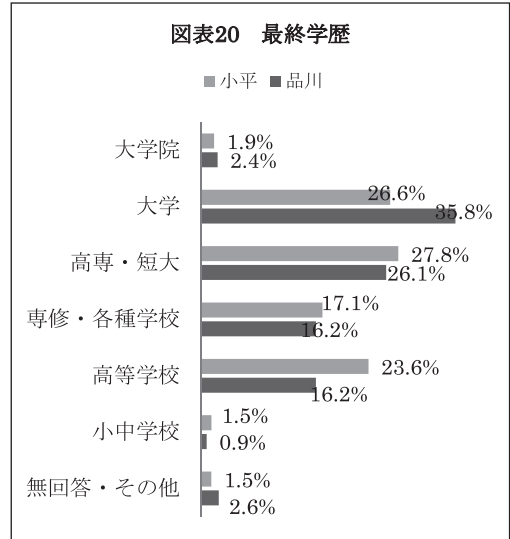


図表19の希望する家族全体の年間収入では、800万円以上の年間収入を希望している割合は、小平市は50.2%、品川区は61.5%である。また小平市は800～1000万円未満、品川区は1000～1200万円未満の希望が割合的には一番多く、どちらも今の年収より200万円程度の高い額を希望している。加えて、図表18の年間収入との関係では、品川区の半数以上が800万円以上の収入であるため、小平市の方が実質的には年間収入の増加を希望している人が多いと考えられる。



図表20の最終学歴では、大学卒以上が小平市

では28.5%、品川区では38.2%であり、品川区が10%程高かった。図表16の職業や図表18の去年1年間の収入などを勘案すると、品川区の方が一定の職業を持つ共働き世帯が多いと言えるのではないだろうか。



2) 重回帰による解析

単純集計では得られない回答間の関係性を考察するため重回帰による解析を行った。以下、解析方法を説明し、そこから得られた知見を報告する。

解析方法

・質的変量と量的変量の変換

アンケートで得られる回答の多くは質的変量のため、そのまま相関を求めたり、重回帰に供することはできない。また、量的変量に変換することが難しい回答も少なくない。そこで、比較的量的変量に変換しやすい回答として、表Iに示した19の設問を選択した。これらの設問の回答を表Iに示した範囲に当てはめて量的変量に変換した。

未記入や変換不可能な回答があるレコードは、そのレコード全体を解析から除外した。そのため、全850レコードのうち、小平市198レコード、品川区417レコード、計615レコードが有効なレコードとして解析に用いられた。

表 I 回答と数値への変換

変量	表記	範囲
信頼	一般	信頼1
	旅先	信頼2
日常生活	満足度	-2~2
日常付合	人の数	0~25
相談や頼りにする	組織	市役所
		教育機関
		医療機関
		警察
		自治会
		NPO
	人	近所
		家族
		親戚
		友人
自身のこと	年齢	17~72
	居住年数	0.5~25
	家族人数	1~6
	収入	150~1300
	希望収入	

・相関係数

得られた19変量の各組み合わせに対して相関係数を求めた。得られた相関係数に対して、無相関(相関が0)の検定を行った。重回帰に対応する部分の結果を表II(小平市)、表III(品川区)にそれぞれ示した。

・重回帰

「信頼1」、「信頼2」および「満足度」を目的変量、それ以外の変量を説明変量として重回帰を行った。重回帰では目的変量を説明するために、各説明変量がどの程度寄与しているかの度合いを標準回帰係数として得られる。この標準回帰係数に対して、標準回帰係数が0の検定を行った。また、説明変量全体でどの程度目的変量を説明できているかを示す重相関係数も算出し、重相関係数0の検定(F 検定と同等)も行った。これらの結果を表IV(小平市)、表V(品川区)に示した。

(1) 機関への頼りがい

前述の図表1では、一般的な人への信頼は小平市と品川区で明確な差異が見られなかった。一方、図表11の機関への頼りがいでは、教育機関

への頼りがいと医療機関への頼りがいは、小平市、品川区ともに同程度の割合を示し差異が少ない項目であった。そこで相関や重回帰による解析を試みる。

頼りにする対象が機関の場合には、小平市では他人への信頼(信頼1)と「教育機関」の相関が0.205であり、「医療機関」の0.019と比較して相関が強いことが示された(表II)。このことは、標準回帰係数(「教育機関」0.149、「医療機関」-0.026。表IV)からも支持される。つまり、図表13・14にもあるように、小平市の方が学校と地域との結びつきが強い傾向にあることが改めて示唆された。

一方、「医療機関への頼りがい」では、表IIIに示されているように品川区の方に0.158と相関が強くており、標準回帰係数(0.121。表V)からも支持された。地域性や人口分布等が異なるため一概には言えないが、東京都の区市別医療施設数のデータでは、2008年度の小平市の一般診療所数は125か所、品川区は424か所であり、また品川区は近隣区に第二次の医療機関も多いため医療機関が整備・充実しているという見方もある。しかし、地域ネットワークの観点では、医療機関への頼りがいが強くなる傾向は、コミュニティにおける人間関係・信頼関係の希薄化の現れの一つでもあると考えられる。

(2) 人への頼りがい

小平市、品川区ともに頼りにする対象が人の場合には、他人への信頼との間に比較的強い相関がみられた。つまり、他人を頼りにする人ほど他人を信頼する傾向があると言える。

一方、標準回帰係数をみると、地域間の差が見え、小平市では「家族」を頼りにする度合いが、品川区では「友人」を頼りにする度合いが、それぞれ他人への信頼への寄与が高いことが分かる。つまり、小平市は家族を含んで他人との関係を持ち、品川区は個人と他人との関係での頼りがいが強い傾向を示していると考えられる。

表II 重回帰部分の相関 (小平市) 表III 重回帰部分の相関 (品川区)

変数	小平市			変数	品川区		
	信頼1	信頼2	満足度		信頼1	信頼2	満足度
人の数	0.222***	0.313***	0.117*	人の数	0.078	0.062	0.098*
市役所	0.111	0.182**	0.195**	市役所	0.048	0.066	0.165***
教育機関	0.205**	0.217**	0.080	教育機関	0.115**	0.074	0.222***
医療機関	0.019	0.066	0.104	医療機関	0.158***	0.138**	0.171***
警察	0.019	0.042	0.172**	警察	0.103*	0.064	0.219***
自治会	0.085	0.088	0.158*	自治会	0.102*	0.073	0.165***
NPO	0.155*	0.242***	0.128*	NPO	0.070	0.065	0.106*
近所	0.230***	0.221***	0.279***	近所	0.194***	0.155***	0.263***
家族	0.217**	0.148*	0.301***	家族	0.163***	0.098*	0.302***
親戚	0.096	0.036	0.308***	親戚	0.192***	0.104*	0.241***
友人	0.188**	0.129*	0.183**	友人	0.270***	0.184***	0.132**
年齢	0.267**	0.242***	-0.007	年齢	0.023	0.024	-0.137**
居住年数	0.148*	0.177**	-0.006	居住年数	0.011	-0.030	-0.032
家族人数	0.046	0.090	0.115	家族人数	0.047	0.045	0.123**
収入	0.223***	0.110	0.046	収入	0.019	0.001	0.285***
希望収入	0.058	-0.062	-0.088	希望収入	-0.015	-0.042	0.143**
平均	0.15	-0.51	0.31	平均	0.24	-0.63	0.46
標準偏差	2.27	2.38	1.12	標準偏差	2.17	2.27	1.08

***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05 ***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05

表IV 標準回帰係数 (小平市) 表V 標準回帰係数 (品川区)

変数	小平市			変数	品川区		
	信頼1	信頼2	満足度		信頼1	信頼2	満足度
人の数	0.108*	0.215**	-0.008	人の数	0.020	0.027	0.022
市役所	0.021	0.073*	0.133*	市役所	-0.052*	0.010	0.040*
教育機関	0.149*	0.133*	-0.063*	教育機関	0.000	-0.036	0.078*
医療機関	-0.026	-0.001	0.003	医療機関	0.121*	0.131*	0.025
警察	-0.096*	-0.086*	0.054	警察	0.013	-0.029	0.049*
自治会	-0.024	-0.123*	-0.016	自治会	0.000	-0.032	0.054*
NPO	0.099*	0.204*	0.014	NPO	-0.055*	-0.007	-0.069*
近所	0.074*	0.070*	0.157*	近所	0.088*	0.101*	0.128*
家族	-0.173*	0.110*	0.198*	家族	-0.017	-0.014	0.168**
親戚	-0.022	-0.051*	0.225**	親戚	0.082*	0.011	0.075*
友人	0.078*	0.022	-0.076*	友人	0.212***	0.141*	-0.078*
年齢	0.152*	0.150*	-0.057*	年齢	0.057*	0.069*	-0.120*
居住年数	0.071*	0.052*	-0.026	居住年数	0.028	-0.038*	0.031
家族人数	0.041	0.076*	0.137*	家族人数	0.010	0.030	0.064*
収入	0.331***	0.259**	0.327**	収入	0.054*	0.066*	0.339***
希望収入	-0.166*	-0.240**	-0.295**	希望収入	-0.060*	-0.102*	-0.094*
N	198	198	198	N	417	417	417
F	3.819***	4.234***	3.671***	F	3.001***	1.679*	7.963***
R	0.502	0.522	0.495	R	0.327	0.251	0.492
R ²	0.252	0.272	0.245	R ²	0.107	0.063	0.242
調整済R ²	0.186	0.208	0.178	調整済R ²	0.071	0.025	0.211

***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05 ***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05 (参考 *p<0.1, *p<0.5) (参考 *p<0.1, *p<0.5)

(3) 日常生活満足度に関して

「日常生活満足度」(表は満足度と記載)に関しては、「知り合いの数(人の数)」とはあまり強い相関がなく、頼りにする対象全体(とくに品川区)と相関がみられた。標準回帰係数では、小平市、品川区ともに「近所」や「家族」を頼りにする度合いが「満足度」への寄与が高いことが示唆される。「他人への信頼」では、「近所」の寄与は両地域とも、「家族」の寄与に関しては品川区で見られなかった傾向である。そのほか、小平市では「親戚」の寄与が大きくなり、品川区では「友人」の寄与が小さくなるなど、「他人への信頼」とは異

なる傾向がみられている。このことは、「生活に満足する」ことと、「他人を信頼する」ことは、

(当然であるが)同じ原因から得られるものではないことが分かる。今回は示していないが、「満足度」と、「信頼1」、「信頼2」との相関係数は、小平市で0.230と0.168、品川区で0.261と0.197となっていた(小平市の「満足度」と「信頼2」で0.01%、それ以外では0.001%の有意水準で無相関が棄却されている)。つまり、「日常生活満足度」と「他人への信頼」の間には有意に関係性が認められるものの、けて強くはなく、前述したことを支持するものである。

(4) 他人への信頼と収入や希望収入

「他人への信頼」と「収入」や「希望収入」との相関は、小平市における「他人への信頼1」と「収入」に関してのみ比較的強くなっており、あまり明確な関係が見られなかった。標準回帰係数をみると、地域間の差が明確となる。小平市では、「信頼1」に対して「収入」は正に寄与(正の標準回帰係数が得られている)し、「希望収入」は逆に負に寄与(負の標準回帰係数が得られている)していた。小平市では、収入が高い人ほど、また希望する収入が低いほど、より人を信頼するようになると受け取ることができる。品川区でもかなり弱いがこの関係性を見ることができている。単純理解すると、経済的に安定しておりこれ以上高望みしない人間ほど他人を信頼し、逆に経済的に困難で裕福になりたいと望んでいる人ほど他人を信頼しないということになってしまう。しかしながら、重回帰のモデルが説明変数と目的変数の直接的関係性を見積もるものではないことを考慮すれば、この「他人への信頼」への「経済力」の高い寄与は直接的なものではないと考えたほうが妥当である。

(5) 日常生活満足度と収入や希望収入

「日常生活満足度」で見ると、「収入」の標準回帰係数が小平市、品川区ともに0.33程度で

キャピタルが高い(経済社会総合研究所(2005))とされている。本研究の集計結果においても、相対的に所得が高い品川区の方が、日常生活満足度は高く(図表9)、一般の人への信頼度においても、全国平均よりはるかに高い(図表1)。

しかし、対象者の構成的要素である年齢・性別・所得などだけでは説明できない事象もあると考えられる。つまり、一般論としては、「所得が高い品川区の方がソーシャル・キャピタルは高い」(稲葉2008)が、本調査の関心事である学校と地域との結びつきについては、小平市の方が日常的な結びつきは強い傾向にあった。そのような地域の文脈から言えることは、一つには、小平市と品川区の違いは、品川区は学区制を廃止し、小平市は維持しているという点である。そして、その学区と自治会等との結びつきが強い傾向にあるという点であろう。また、調査対象である小平市の小学校のうちの1校は創立から100年以上の歴史を持つ。その学校の卒業生が地域に点在するという歴史性や地域性が、家族ぐるみの地域や学校という関係にも影響を与える結合型のソーシャル・キャピタルを維持していると考えられる。換言すれば、ソーシャル・キャピタルの豊かさは、地域全体の環境や地域性から説明される文脈に大きな影響を受け、それらを含み持って形成されていると言えるのではないだろうか。

2) 意識の変化とソーシャル・キャピタル

本調査における品川区の特徴は、「ある程度の人たちとの交流」があり、「日常的には立ち話程度」の人たちの日常生活満足度が高い傾向にあることである(森山・瀧口2010)。また、趣味活動は家族とともに行う(図表7)が友人を頼りにしている傾向は強く、放課後に子どもを友人宅に預ける割合も高い(図表15)。このような現象は、都市部におけるコミュニティの希薄化にも関係するのであろうが、人間関係は深入りしないが必要などころでは協力しあう関係性の現れとも考えられる。つまり、近所づきあいの人数が多いほどつ

きあいの程度も深まるという大前提があるなかで、つきあいの人数がそれなりであっても、生活に支障のない社会関係が形成されていれば、日常生活満足度はそれなりに高いという考え方である。重回帰による解析にもあるように、「生活に満足する」ことと、「他人を信頼する」ことは、同じ原因から得られるものではないであろう。

2007年の全国調査(日本総合研究所2008)でも、地域活動に参加している人ほど、普段の生活で協力し合えるつきあいがあるとしているが、一方では、ほとんどの人が地域活動に参加するのは年に数回程度と答えていることから、日本全体でコミュニティにおける人間関係は年々希薄になっていると考えられる。それ故に、コミュニティの変化と人間関係に対する人々の意識の変化を含めたソーシャル・キャピタルの指標、すなわち人と人との連携力を強化するための橋渡し型のネットワークの構築が、現在の地域社会には一層求められていると言えるであろう。

5. おわりに

内閣府が行った調査をもとに、2007年度から小平市のソーシャル・キャピタルに関する調査をはじめ、翌年の2008年度には品川区においても同様の調査を行った。ソーシャル・キャピタルの提唱者であるパットナムは、人々の地域への参加による横のつながり、すなわち「水平的ネットワークが密になるほど市民は相互利益に向けて幅広く協力する」(Putnam2001)と述べており、本研究においても横断的な地域ネットワークの必要性が示唆されたと思われる。

折しも本稿をまとめる時期に東日本大震災が起り、未曾有の人たちの生活が奪われ脅かされた。このような事態に、改めて地域のつながりの大切さを痛感した人々も多いのではないかと思う。今後はこれまでの研究活動の蓄積を踏まえ、本学のある小平市周辺地域に目を向け、具体的な行動を通してネットワーク形成に寄与して行きたい。

1) プラン 21 とは、教育改革の長期計画であり、学校・家庭・地域社会の連携づくりの一つとして、放課後児童健全育成事業（すまいるスクール）が実施されている。区内の何校かの小学校に設置されて、放課後や土曜などに子どもを預かってくれるシステムである。

<文献>

- ・ 稲葉陽二 2008 ソーシャル・キャピタルの潜在力 日本評論社
- ・ 草野他 2008 地域ネットワークに関する調査研究 白梅学園大学 短期大学 教育・福祉研究センター研究年報 No.13
- ・ 草野・瀧口眞 2009 人間への信頼とソーシャル・キャピタル 白梅学園大学・短期大学紀要第 45 号
- ・ 草野・瀧口眞 2009 人間への信頼とソーシャル・キャピタル 白梅学園大学 短期大学教育・福祉研究センター研究年報 No.14
- ・ 草野・瀧口眞 2010 人間への信頼とソーシャル・キャピタル 白梅学園大学 短期大学教育・福祉研究センター研究年報 No.15
- ・ 橋本俊詔 2010 日本の教育格差 岩波書店(新書)
- ・ 日本総合研究所 2002 ソーシャル・キャピタルー豊かな人間関係と市民生活の好循環を求めて 内閣府委託
- ・ 日本総合研究所 2005 コミュニティの機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書 内閣府委託
- ・ 日本総合研究所 2008 日本のソーシャル・キャピタルと政策ー日本総研 2007 年全国アンケート調査結果報告書
- ・ 広井良典 2009 コミュニティを問いなおす ちくま書房
- ・ 森山・瀧口 2009 社会的ネットワークとソーシャル・キャピタル 白梅学園大学・短期大学紀要第 45 号
- ・ 森山・瀧口 2009 生活の満足度と属性 白梅学園大学 短期大学教育・福祉研究センター研究年報 No.14
- ・ 森山・瀧口 2010 社会への意識とソーシャル・キャピタル 白梅学園大学 短期大学教育・福祉研究センター研究年報 No.15
- ・ ロバート・D・パットナム 柴内康文訳 2006 孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生 柏書房
- ・ Putnam, Robert D 河田潤一訳 2001 『哲学する民主主義 ー伝統と改革の市民的構造』 NTT 出版
- ・ Putnam, Robert D. 柴内康文訳 2006 『孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房